

高里 鈴代さんが語る 「CAPへの期待」



「おきなわCAP」の理事であり、「強姦救援センター沖縄・レイコ」の代表、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の共同代表を務める高里鈴代さんに、前回の「CAPとの出会い」に引き続き、おきなわCAPの活動への期待を語ってもらいました。

相談の受け皿をつくること

婦人相談員をしながら、あるいは強姦救援センター沖縄・レイコの活動をしながらも、子どものころに性被害にあった人がどれほど苦しんでいるかを見てきました。

例えば、小学校2年生のときに性被害を受けた子が直後に親に打ち明けることができていたとしたら、そして親がその子の話を受け止めて、適切な対応をしていたとしたら、今40代になっているその女性は、こんなに長い間苦しまなくてよかったのではないかと思うわけです。

ほかにも、すでに中学生になった、あるいは高校生になった子が幼いころから父親に性的虐待を受けていたというケースもありました。その子が早い時期に学校でCAPを受けていて、そのことを先生に言えていたとしたら…。私がずっと関わっていた人たちが、もしもCAPに出会っていたら、問題解決は可能だったのではないだろうかと思うのです。

ですから、子どもたちの相談の受け皿をつくってから子どもワークショップを実施するというその着眼点は素晴らしいです。

親は子どもを愛しているのに、子どもが抱えた問題を受け止めることができずに、逆に子どもを責めてしまい孤立させてしまうこともあります。

CAPプログラムの良いところは、親・教師にもワークショップをして、子どもとどう関わればいいのか伝えていけることです。

カリキュラムとしての継続性を！

さまざまな暴力のケースを想定して、不快なことに「ノー」と言える力を子どもたちの内側から引き出す。実際その力が子どもにあるんだと信頼を持って語りかけるというCAPの活動は、本当に必要だと思います。

ただ、クラス単位の少人数で実施するので、人も関わるし、予算もかかります。大阪などいくつかの市では教育委員会で予算化しているということを知り、那覇市でも予算化させたいと、市議の頃は何度も議会で取り上げました。

保育園や幼稚園、あるいは1年生になったら、CAPを受けられるというように、定着していけたらいいのですが、そうならないのが現状です。

環境教育や平和教育にしても、継続して積み重ねていくということには今ないのがとても残念です。

社会はいじめの問題がクローズアップされれば、いじめのこと、児童虐待といったら児童虐待のこと、子育て支援で予算がつかますといったら、子

育て支援…といったように、大きな話題になることに左右されていく傾向があります。CAPも最初のころは、目新しいものとしてある一定の関心と興味は引きつけましたが、また別のものに興味が移り、新しいことを行事に取り入れるためにCAPの継続が困難になるということもあるでしょう。CAPの本当に目指していることの大事さ、継続する意義をどう伝えて行けるかが課題ではないかと思います。

何度もCAPを呼んでくれる学校には、「CAPの推進者」が必ずいるはずです。キーになる人とつながり、情報交換をしていくことで、CAPの効果を調査することにも取り組んでみたらどうでしょうか。

チームで動く活動の良さ

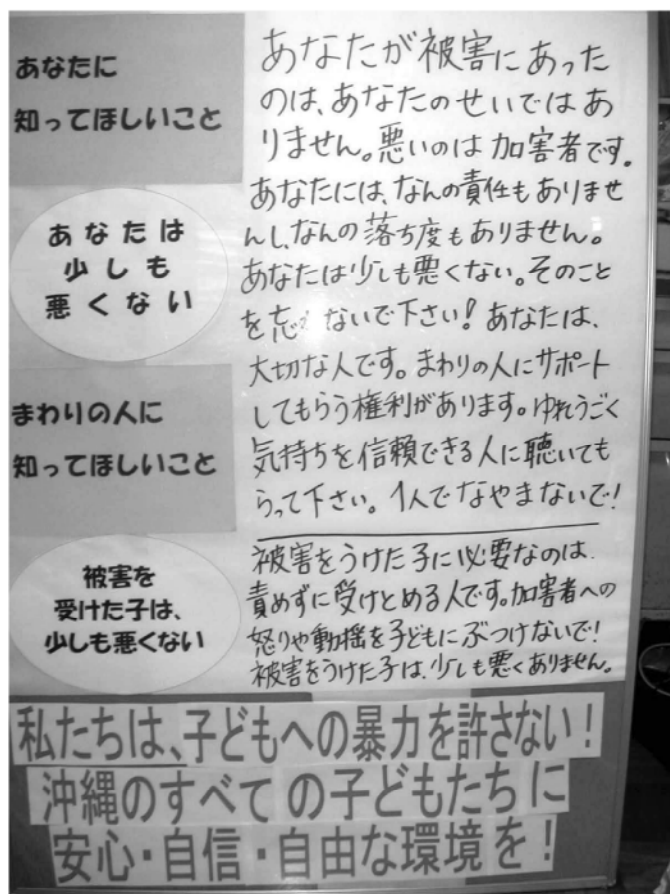
私が中学や高校から講演を依頼されて、飛び回っていたころ、「一人でもいい、被害にあってい

る子が、支援につながるように」という思いで頑張っていました。事後アンケートを読むと、講演をしてよかったと思う一方で、活動を一人で続けて行くというのは、疲労感も大きいものでした。

けれど、CAPの活動はチームで行います。疲労感を覚えても、問題にぶつかっても、活動している人同士で、疲れを癒すことができるし、問題を解決していく方法を見つけることができます。

メンバー同士でも、ワークショップのときにも、きめ細かく一人一人を大切にしていこうと、社会全体の一人一人を大切にするという意識を高めていくものにCAPはなっています。

相変わらずレイプの被害や、暴力の問題起こり続けています。声を出して訴えたら、聞いた人が蓋をするのではなく、受け止めて適切な方法で支援につなぐ。そういう社会に確実になっていけるように、自分たちの活動の力を意識しながら取り組んでいって欲しいと思います。



← 2月17日、沖縄国際大学でNPO出会い市が開催され、おきなわCAPも参加しました。活動アピールのためにパネル展示をしましたが、出会い市直前に本島中部で起きた米兵による暴行事件を受けて、急遽、高里鈴代さんと相談し“あなたは悪くない!!”というパネルを新たに作成しました。